

巻頭言

2008.2月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

涙のあとに来るもの。

茗溪塾塾長 宇野雅春

ひとしきり泣いたのか、母親に連れられてきた君の目の縁にまだ涙のあとが残っています。明日の受験に向けて面接練習を始めながら、「不合格」を残念に思う子供の気持ちを考えました。準備が遅かったとか、病気がちだった、とかいろいろな思いが頭の中を巡っています。でも、面接練習が進むにつれて笑顔もちらほら見えてきました。子供の良いところは、楽観的に物事を考えるということです。子供だからこそ、「不合格」は最初から頭のないもの。初めて自分の思いが「拒否」されて、大きく戸惑うのも無理のないことです。その学校一校だけで2000人が不合格になっているのですから、泣いている場合ではありません。気を取り直して、明日に向けてGO！です。といいながら、普段、生意気なくらいの君の涙はちょっときつかった。

中学受験は過去最高の受験者数を数え、どの学校も激戦でした。多分ほんの数点の差で明暗がわかれているのだらうと思います。打つ手は全て打ったと思っていても思いがけない失敗はです。茗溪模試の直前諸注意で「フィギュアスケートと同じで、その日3回転ジャンプが成功するかどうかと似ています。」といったことが、生徒の合否一覧を見ていると思ひ出されます。

受験に確実さを求める傾向がありますが、今の中学受験に確実はありません。第1志望に向けて、いろいろな場合を想定しながらチャレンジを続けていくという点では高校受験より大学受験に近い様相です。ある程度の数を受けていかないと納得のいく結果が得られないということですから、ここに塾の進学指導の責任があると思います。

毎年いろいろな事を考えますが、今年一番強く感じたのは基本をじっくりと積み上げてきている生徒が一番強いということです。当たり前のことが、当たり前のこととしてきちんと把握されていれば、応用力も自然に伸びてくるということです。どんなに難しい問題がさらりと解けても、常識的な部分を落としている生徒は本番で難航します。不合格の答案に一番多いのは、首をひねるような勘違いの答えがたくさんあるということです。緊張のせいで、間違えなくてもよい問題を間違えまくるということですが、基本知識があいまいだとそういうことが起こります。

今年の秋、佐倉市のある中学校で職業体験のための講演を中学一年生を対象にやった時、生徒からの質問に「この仕事をしていて1番嫌なことは何ですか？」というのがありました。その時私は即座に「合格発表の日です。」と答えました。ずーっと祈るように待ち続けていて「残念！」の辛さが本当に身にこたえるからです。

そして今年も同じような思いで合格発表の日を迎えました。でも今年私の中で何かが違っていました。誰もがその努力の度合いに応じて落ちてくるところに落ちてくるという確信のようなものがありました。1月中合格の全くでなかった生徒が、2月1日、2日とハイチャレンジでさらに不合格を出しても、それほど慌てませんでしたし、案の定、予定していたかのように3日、4日で合格を獲りました。不合格を悔しがってはいたけれど、本人はいつも笑顔でいたし、その生徒の実力への私の確信はぐらつかなかったということです。インターネットに掲示された合格者がたったの20数名、ヒヤリとしたけれども、受験番号が確かに、そこにはありました。誰もが背水の陣で臨んだ2回目の試験です。その中で少数の上位にはいるというのは相当な精神力を要求されるはずで、そこに耐えてついに勝ち取った合格はより価値の大きいものになったようです。自分の失敗の原因に気づいたことで学習への意欲は更に増したようで、本人は早速また、勉強を始めました。

そんな経験の中で行き着いたのは、「合格」の喜びは一瞬のこと、「不合格」という結果は悔しいものだけれども必ず次への飛躍につながる！という強い気持ちです。「合格」も「不合格」もそんな風に考えれば、尊いものに思えてきます。

合格の涙、不合格の涙、その涙のあとに来るものは「現実」という課題です。つまり、そのあとを生きていくという「現実」です。立派な学校に合格したからといって全てがバラ色になるわけではありません。そこにはその新たな課題が待っているはずで、

中学入試は、たくさんの悲喜こもごもを残して終了しました。今、高校入試、大学入試は真っ最中です。自分の目標へ向けしっかりやりきってほしいと思います。結果はあとからついてくるもの。どんな結果にせよ、悔いを残さないよう、最後までやり抜いてほしいと思います。全員の合格を祈ります。